

Title	乳児死亡の季節変化
Author(s)	光山, 恭子
Journal	東京女子医科大学雑誌, 33(4):150-150, 1963
URL	http://hdl.handle.net/10470/14048

[学 会]

東京女子医科大学々会 第118回例会

日 時 昭和38年2月22日(金)午後2時より
場 所 東京女子医大病院第一臨床講堂

1. 乳児死亡の季節変化

(衛生) 光山 恭子

乳児死亡の季節変動に関しては戦前十分な資料がないので部分的な研究しかみられない。私は全国都道府県別に昭和22年より34年にいたる戦後の資料により、暦月別乳児死亡率を算出し、その季節変動の地域的差異を観察したので報告する。

1) 戦前と同じように戦後しばらくは冬の大きい山の外、夏にも一つの小さい山を示す双峯型であるが、次第に夏の山は小さくなり冬だけの単峯型へと季節変動の型をかえてきている。しかし近年でも夏の山の名残りを示す数県がある。

2) 全国および大多数の地域は1, 2月を山とし、8, 9月を谷とする単峯型を繰返す。岩手県をはじめ東北、北陸など、特に乳児死亡率の高い数県に3・4月をピークとする県がある。このように春の死亡の多いことは、主に、1日の気温の日格差の大きいことなどによる肺炎などの他、長い冬のあとのビタミン欠乏などにより乳児の抵抗力がおちていると考えられる。

3) 暦月別に乳児死亡の年次変化をみると一般に高い冬の月と低い夏の月とは、乳児死亡の低下に伴い、その季節変動の振幅を狭ばめてゆく。また最高の月は年次的に動揺が大きく、最低の月は滑らかに経過してゆく。

4) 地域的に各暦月別乳児死亡率の分布の状態をみると、その散布度は春・冬に大で、夏・秋に小さい。すなわち、乳児死亡にみられる地域差は、冬と春の高低によつて、より多く支配されていることがわかる。

5) 都道府県別に乳児死亡の高い2月と低い8月の相関関係をみると、 $r=0.78$ の高い平行関係にあり、4月と10月もほぼ同様である。一般に乳児死亡率の高い地域は、四季を通じて高い傾向にあるといえる。

2. 幼児の十二指腸潰瘍の1例について

(小児科) 小泉とし

小児の胃、十二指腸潰瘍は何といつても大人よりは少ない。小児の胃、十二指腸潰瘍は1825年 Shieboard の報

告に始まり、1941年 Bird らが 243例を集め、本邦では昭和18年友田らが 242例の本症自験例を含めた文献例の総括的観察を行なっているが、最近は国の内外を問わず、増加の傾向があるといわれている。

症例は4才8カ月の男児で、主訴は一時的意識消失であり、既往歴に自家中毒症に4~5回罹患した事がある。本症は発症2~3日前より38°C発熱、悪心、嘔吐、腹痛を訴えたが、浣腸で黄褐色有形便を排泄した。発症4日目に突然意識不明になり、医師が訪れた時には対光反射の消失が認められたので直ちに送院された。入院時の末梢血は赤血球 590×10^4 、Hb ザーリ84%であった。自家中毒症で5%ブドー糖リンゲル点滴静注により症状の軽快を見たところ、同様突然ショック症状を呈し、脈を触れず、30分後に大量のテール便排泄を見た。翌日赤血球は188万、Hb 38%と急激な貧血を示した。以後輸血毎日200~400cc、止血剤、抗生物質、止血の目的にブレドニロン10mgを併用し、一時に症状軽快を来し貧血の回復も見られた。しかし入院50日間に度々の腸出血発作を繰返し、衰弱の徴候が見え、かつ胃腸透視で十二指腸潰瘍を疑う陰影を見たので、外科に依頼して開腹した。しかし胃、十二指腸、小腸、大腸に黒色凝血塊を認めたが潰瘍不明のため、そのまま閉じた。2日後に死亡した。

剖検当時は潰瘍部不明であったが、フォルマリン固定後、幽門下約半示指の所に8mm×5mm大の潰瘍を検出し得た。そして潰瘍部の穿孔による膈頭部との癒着があり、潰瘍底に露出する動脈断端が認められ、このための出血死と考えられた。

3. 癒着性脳蜘蛛膜炎の臨床研究

(精神々経科) 栗野 竜、柴田牧一、○稲川鶴子

第I例は、大脳左中心溝域の癒着性蜘蛛膜炎による症候性癲癇。第II例は、後頭蓋窩右側の癒着性蜘蛛膜炎。第III例は、右前頭~頭頂の癒着性限局性水腫状蜘蛛膜炎。以上の3症例について、その臨床研究を行なった。原因として第I例では、10年前あるいは8年前の外傷、